

どんな情報が必要か ― 〈チェンジ〉を促す情報を

京都大学防災研究所 矢守 克也

1. 2種類の情報（想定）

災害に関する情報（想定）には、性質がまったく異なる2つの種類がある。第1は災害（自然現象：ハザード）に関する情報であり、第2は被害（社会現象：被害ほか）に関する情報である。

このうち、前者については、私たちが今こうして情報を知ったことが、実際に起こることに影響を及ぼす可能性はない。「(新) 想定」を知った今も、知らなかった数年前も、それとは無関係にトラフ付近の地殻運動は粛々と進んでいる。この意味で、第1の情報は、「当たるか当たらないか」。そのどちらかである。

他方で、後者については、情報を私たちが知ったことによって、この先何が起きるかが変わる可能性がある。被害は、純粋な自然現象と違って、私たち人間の反応や社会の準備によって変化するためである。後者は、悲観的にせよ楽観的にせよ、「そのような未来が待ち受けているのですね」と政府の試算をそのまま受け入れるようなものではない。この意味で、第2の情報では、「変わるか変わらないか」が問われる。

別言すれば、災害情報（想定）は、この意味での〈変化〉を促すような、しかも、いい方向への〈変化〉を促すような内容と様式をもっていなければならない。これが、情報に対して筆者がもっている基本的な構えである。

2. 「個別訓練」の事例 ― 〈変化〉を促す情報

「個別訓練：タイムトライアル」は、上記のスタンスで筆者らが取り組んでいる実践事例の一つである（京大防災研「減災社会プロジェクト」の一環）。

通常の避難訓練には多くの人が参加するが、この訓練は個人または家族で行う。訓練者は、自宅の居間などから高台など避難場所まで実際に逃げてみる。この一部始終を、防災学習を兼ねた地元の小学生たちが2台のビデオカメラで撮影する。訓練者は、GPSロガーをもっていて、何分後にどこにいたかが地図上に表示される。

以上の結果を、「動画カルテ」と呼ぶ映像にまとめる。画面は4分割されている。第1の画面には1台目のカメラ映像が、次の画面には2台目のカメラ映像が、第3の画面には訓練者の訓練中の言葉と子どもたちの訓練者へのメッセージが、第4の画面には上述の地図が映しだされている。画面中央に時計表示があって、4つの画面はスタートからゴールまでずっと連動して動く。

さらに、この地図には、津波浸水シミュレーションの映像（鈴木進吾・防災研助教による）が、訓練者の実際の動きと重なって表示される。だから、たとえば、「ここまで逃げたときに、自宅にはすでに津波が来襲、間一髪だった」、「あと5分早く家を出るための準備と努力が必要」、「この橋を多くの人が使う、耐震補強」といったことが一目瞭然でわかる。

「動画カルテ」は、以下の4点を実現している点が重要である。第1に、カルテを通して、〈チェンジ〉（「津波による犠牲者×人」という想定情報を変化させること）に向けた具体的な手がかりを獲得できる。第2に、カルテ上で、自然科学（津波シミュレーション）と社会科学（避難行動分析）の知識とノウハウがクロスしている。第3に、カルテによって、専門家と非専門家との間で「共同」が実現している（訓練者が自らたたき出したタイムと専門家のシミュレーションとは互いに他があってこそ活きる）。第4に、避難する人自身が「主役」となった減災活動となっている。



参考図：「動画カルテの一例」：地図画面の下から津波が迫っている。●印が避難者の現在位置、実線が経路。